

シオン通信

大宮シオン・ルーテル教会 礼拝説教集

2007 年 7・8 月合併号 第 13 号

日本ルーテル教団

大宮シオン・ルーテル教会

〒331-0814

さいたま市北区東大成町 1-229

phone/fax : 048-663-0215

URL <http://omiya.church.jp>

Email omiya@church.jp

大宮シオン・ルーテル教会

梁 熙 梅(やん・ひめ)

わたしの夏体験

記録的な暑さが続き、異常気温と言われるこの夏ですが、いかがお過ごしでしょうか。暑い中であっても、確実に秋は近づいているはずですが、クマゼミの鳴き声は止むことなく、太陽の勢いも弱まることを知らず照り続けています。皆さまが無事に暑さを乗り越えますように、祈っております。

今年は夏休みをいただいて、子どもを連れて故郷の済州道へ帰ってきました。日本では済州島と呼ばれていますが、韓国では、国の 8 道の中の一つの道ですので、済州道と呼ばれます。この夏、数年ぶりに帰り、東洋のハワイと呼ばれるにふさわしく変わりつつある島の姿に、嬉しい気持ちとともに少し残念な気持ちもありました。以前は素朴だった自然が、人間の手が加わることによって整えられていて、ありのままの姿を失いつつあったからです。わたしが生まれ育った村の海辺には観光客のためのホテルが二つも建てられ、以前よりにぎやかになっていました。経済は人間の暮らしを豊かにしてくれるものではありませんが、しかし、ほんとうの豊かさは奪われていくものだと思いされました。ホテルが建てられて村の見栄えはよくなってきた分、昔、わたしがまだ子どもだった頃泳いで遊んでいた港にはもう子どもはいなく、寂しそうに小さな船だけが波に揺れていました。その寂しさを壊すかのように、わたしの子どもが裸になって海へ入り、海草と遊びながら泳いで楽しんでいました。彼は大満足だったようです。

韓国から帰ってきて、しばらくしてから日光の白根山を山頂まで登ることができました。わたしにとって山頂まで登ったのは人生初めての体験であり、褒めるべき体験です。済州島には韓国で一番高いと言われる山（ハンラ山）がありますが、高校 2 年のときに途中でお腹が痛いと言いついて降りてきた以来、初めての登山でした。ですから、登る前夜は、わたしが本当に登れるのかという不安もありました。そのような不安の中で、過去の痛い思いを去らせ、また他の山を登ってみたいという思いさえ抱くようになったのは、ともに山を登り、積極的に導いてくれた仲間のお陰でした。白根山は決して低い山ではありませんが、年配の方々が元気そうに登っておられる姿を目の当たりにしながら、今度は負けないように体力をつけてもう少し元気に登ろうと、自分に言い聞かせながら降りてきました。

この通信が今回は 7・8 月合併号になりました。遅れてしまい、申し訳ありません。

後ろの絵は子どもが韓国から帰りの飛行機の中で描いたものです。

聖書のみことば

ルカによる福音書 10: 25～37

25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27 彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

説 教

『ある人』の隣人になって

今日の福音書の日課、善きサマリア人の物語はとても有名な箇所です。皆さんも良くご存知のところでしょう。キリスト教会は長い歴史の中で、この善きサマリア人に習って人を助ける、隣人を自分のように愛する精神を養ってきました。けれど、今日は少し違う角度からこの箇所を見てみたいと思います。

今日の福音書の中で、善きサマリア人がたとえに語られるようになったきっかけは、ある律法の専門家がイエスさまを試すために立ち上がったことによってでした。

「ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。『先生、何をしたら、永遠のいのちを受け継ぐことができるでしょうか。』」

律法の専門家でありながら、しかし、永遠のいのちを受け継ぐことに関心はあるものの、それを解決することが出来なかった。だから、この頃評判であるこのイエスでも試してみようという思いで聞いているのではないのでしょうか。

というのは、「…ある律法の専門家がイエスを試そうと立ち上がり…」とも書かれています。この後のイエスさまと会話する彼の言葉からもっとわかるのです。つまり、イエスさまが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と聞かれたことに対して、彼は、『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』と書いてあります。」と答えます。このような彼の答えに対して、『正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば永遠のいのちが得られる。』とイエスさまは勧められました。しかし彼は、「自分を正当化しようとして、『では、わたしの隣人とは誰でしょうか。』とイエスさまに聞いているのです。つまり、この彼の質問の意味は、…町のだれだれさんが貧しい人で、その人があなたの隣人だから、その人を助けてあげなさいと言われればやりますという問いかけです。最初から「隣人」たるものを決めて、決められた人に関わってい

きます、助けますというのです。このことは、自分は人を助けられる力を持っている、お金もある、隣人を自分のように愛しなさいと言う律法も知っている、だから隣人が誰なのか教えてくれればできる、という考え七のです。これが彼の傲慢さでもあり弱さでもありました。

イエスさまは、そんな彼を前にして、一つのたとえ話をなさいました。それが善きサマリア人の話です。

「ある人」がエルサレムからエリコへ下って行く途中追いはぎにあった。この「ある人」。この人がどのような人なのか、女性なのか男性なのか、何のためにエルサレムからエリコへ下っていたのか、国籍はどこなのか、この人を知る手がかりは何もありません。

この「ある人」という表現ですが、ルカ15章の放蕩息子の物語にも「ある人」という表現が使われています。つまり、「ある人」に息子が二人いた、と書くことから放蕩息子の物語は始まりますが、ここでの「ある人」とは、二人の息子の父親のことですが、しかし、ルカが「ある人」と表現していることにはそれなりの理由があると考えられます。放蕩息子の「ある人」と表現される父親は、すなわち神さまなのです。それなら、

今日のイエスさまのたとえ話に出ている「ある人」とはいったい誰のことでしょうか。

「ある人」がエルサレムからエリコへ下っていく途中、追いはぎに襲われた。エルサレムとエリコの間は、その周辺の人たちには昔から強盗の名所して知られている所だそうです。そこを、「ある人」が通っていたところ、強盗に会い、服を取られ、殴られ、半殺し状態にされました。人が半殺し状態になっているところを、はじめに通ったのは祭司でした。しかし、祭司はその人を見ると、道の向こう側を通って行きました。次にレビ人が通ります。レビ人も祭司と同じように道の向こう側を通って、遠回りして行きました。ところが、そこへもう一人の人が現われました。旅をしていたサマリア人です。このサマリア人は、強盗に遭った「ある人」を発見するや否や、憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿に連れて行って介護をします。そして、翌日になって、宿の主人にお金を渡して、その人を介護してくださるようお願いしました。それに、もし費用がもっとかかるようだったら帰りに寄って払いますとまで言うのでした。『さて、この三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人に

なったと思うか。』

つまり、「わたしの隣人とは誰ですか」ではないのです。イエスさまの問いかけは、「誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったのか」なのです。逆なのです。

私が日本に来た頃の日本は、私が住んでいた新宿のあたりでも世界で一番安全なところと言われるほど、治安が安定していました。よる12時過ぎに一人で歩いても平気だったのが、今は考えられないくらい治安が悪くなりました。このような状況の中で私たちも、いつ、どこで強盗に逢った人に出会うかわからない。もしかしたら、自分自身が経験しているかもしれませんし、誰かの助けをいただいているのかもしれません。または、助けてあげた経験のある方もいらっしゃるかもしれません。

このように、私たちは、周りで困っている状況を見ると、よほどの理由がない限り助けの手を差し伸べます。助けようとするのです。だけど、祭司とレビ人はしなかった。助けの手を差し伸べることが出来なかったのです。祭司なのに、レビ人なのに、他の人より礼拝を導く立場にもあるのに、神の言葉を語る立場にある人なのに、だからもっと積極的にできるはずなのに、できませんでした。

このようなことから考えますとき、今日のイエスさまが律法の専門家を前にして語ろうとしていることは、普段、いつでも起こりうる状況とは少し違うことだということを、念頭におきたいのです。というのは、今イエスさまが語っている前にいる人は、律法の専門家であるユダヤ人です。聞いている人がユダヤ人で、しかも律法の専門家でなければ、イエスさまが語ろうとしている言葉の意味を間違ってしまうということなのです。先週もお話しましたが、ユダヤ人はサマリア人を外国人、異邦人と言って差別していました。ユダヤ人から見たサマリア人は汚らしい人たちでした。あるとき、イエスさまも同じ扱いをされていました。ヨハネ 8：48 ですが、「ユダヤ人たちが、『あなたはサマリア人で悪霊に取り付かれていますと、我々が言うのも当然ではないか』と言われるほど、サマリア人はユダヤ人から差別され、軽蔑されていました。ユダヤ人から見てサマリア人は、律法をもたない、つまり神から与えられた言葉を持たない民族、ですから、神さまから見捨てられた民族として理解されていたのです。このような状況が背景にあり、今日、イエスさまによって、ユダヤ人の代表的な祭司やレビ人がサマリア人と比較されているのです。

実際、イスラエルの律法では死体に触れることは汚れることでした。民 5 章や 19 章には「死体に触れたら一週間汚れる」と欠いてあります。そして、汚れた者は礼拝の場に出ることができません。特に祭司やレビ人であれば、彼らが礼拝に出られなくなりますと、礼拝そのものが成り立たない、そんな状況になるでしょう。ですから、本当はレビ人だって、祭司だって助けたがったのかもしれない。けれど、触ったら汚れるから、だから、彼らは律法に書かれている文字通りに守り、自分たちが汚れずに礼拝に参加することもでき、礼拝を導くこともできるために、目の前に血を流している人に触らないのです。これが、律法でした。今イエスさまの前で、イエスさまに「私の隣人とはだれですか」と、自分を正当化するために聞いている律法の専門家が尊重し、守っている律法がこれなのです。しかし、そんな彼に今問われていることは、「あなたはそれをどう読んでいるか」、「律法をどう読んでいるのか」という、根本をひっくり返す問いかけです。

今日の福音書のすぐ前には、神さまは、啓示を「知恵ある人」や「賢い人」には知らさずに、「幼子」に示されると、記しています。この知恵あるもの、賢い者の代表である「律法の専門家」が今イエスさまの前にい

ます。この賢い律法の専門家は律法をどのように読んでいるか……つまり、彼の律法の読み方とは、自分を正当化するために「私の隣人とはだれなのか」と問うことでした。神の言葉は、自己正当化の中で読む時に、自分のために利用しようとすればいくらかでもできます。つまり、神のことばを自分と結び付けずに読む読み方を、自分を正当化している読み方であると聖書は言っているのです。このような人が「知恵ある人」または「賢い者」であって、このような人には神さまの本当の心は隠されていると言われるのです。

そうではなく、自分が、本当は罪深い者で、弱く、無力な者であると、自分の欠けているところを認める「幼子」のように神のことばを読んでいくということ。そのとき、「わたしの隣人とはだれですか」という自己を正当化した問いは出てこないはずであると。つまり、イエスさまが問うておられるように、「だれが、追いはぎにあった人の隣人になったか」、直接人に関わっていく、憐れみを持って、今困っている人に「憐れみを行い」に行く、そういう立場に自分をおくということ。つまり、自分の中から自然に出てくる情に駆られて、突発的に行なうものとなるということなのです。

最近、北朝鮮のことでみんなは不安を覚えたりして、北朝鮮を敵対視している人も増えてきたことでしょう。そんな中であるキリスト教団体が、敵の国であるけれども、キリストの愛は敵をも愛する愛だから援助物を送ってあげると、自分たちは善きサマリア人になる宣教の取り組みをしていると言っていました。しかし、善きサマリア人がやったことは、イエスさまが「汝、敵をも愛せよ」と言うような、高度な愛を言っているではありません。イエスさまがここで語っておられることは、一言で申しますと、文字によって自分を殺すな！ということなのです。または、習慣やしきたりによって自分のやりたいことを我慢して、自分ではない自分を振舞う人生の歩み方をするな！ということなのです。

今、突発的に、自分の前に広がっている事柄を見て、本当は助けたいけれど、律法ではさわるな！といっているから、家の習慣では近寄るな！となっているから、日本のしきたりに合わないから、だから本当は助けてやりたいけれど積極的に関わっていくことをやめて、本当の自分を隠して生きる生き方から解放されて生きることを勧められているのです。

ですから、このとき、隣人を自分のように愛せよ、と言う言葉の理解においても、

「私が愛せる隣人とはだれなのだろう？」と対象を捜すのではなく、「自分のありのまま、自然に振舞える相手、その人が私の隣人である」ということになります。職業柄でもなく、信仰の経歴でもなく、クリスチャンか否かによってでもなく、ありのままの自分を相手の前でありのまま表現できるとき、わたしはその人の隣人となっていくのだということ。

つまり、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛する、その次に隣人を自分のように愛するのではなく、わたしが自分らしさを相手の前で見せることができる、弱さもあるけれどありのまま関われる、そんなときのわたしは、心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして神さまを愛していることになるということ。つまり、神のことはばを正当化して読まない読み方＝自分は今向き合っている隣人なしには生きることが難しい者であることを認める人であるということ。そのように律法を読んでいるかということ。

ですから、初めにもしました「ある人」とは、たまたまイエスさまのたとえ話に出てきたのではなく、神さまご自身のことなのです。というのは、神を愛する＝人を愛する、人を愛すること＝神を愛するこ

とであるということなのです。

つまり、クリスチャンだからでもなく、牧師だからでもなく、皆と共に歩んでおられる「ある人」となったださる方、主が隣人となって、ときには傷だらけの隣人となって、私たちを待っていてくださる。私たちが傷ついた方の前で、つまり、十字架の主の前にありのままの姿で歩み出ることができるように、私たちの暮らしの場で傷ついた隣人となったださっておられる。この週も私たちは、この「ある人」に出会い、ともに歩む「わたし」でありますように。傷ついた「ある人」の隣人となって歩むそのようなときでありますように、祈ります。

聖書のみことば

エレミヤ書 23 : 23～29

23 わたしはただ近くにいた神なのか、と主は言われる。わたしは遠くからの神ではないのか。
24 誰かが隠れ場に身を隠したなら、わたしは彼を見つけられないと言うのかと、主は言われる。天をも地をも、わたしは満たしているではないかと主は言われる。25 わたしは、わが民によって偽りを預言する預言者たちが、「わたしは夢を見た、夢を見た」と言うのを聞いた。
26 いつまで、彼らはこうなのか。偽りを預言し、自分の心が欺くままに預言する預言者たちは、27 互いに夢を解き明かして、わが民がわたしの名を忘れるように仕向ける。彼らの父祖たちがバアルのゆえにわたしの名を忘れたように。28 夢を見た預言者は夢を解き明かすがよい。しかし、わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語るがよい。もみ殻と穀物が比べものになろうかと、主は言われる。29 このように、わたしの言葉は火に似ていないか。岩を打ち砕く槌のようではないか、と主は言われる。

ルカによる福音書 12: 49～53

49 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか。50 しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。51 あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。52 今から後、一つの家に五人いるならば、三人は二人と、二人は三人と対立して分かれるからである。53 父は子と、子は父と、母は娘と、娘は母と、しゅうとめは嫁と、嫁はしゅうとめと、対立して分かれる。」

説 教

わたしのバアル

先週は日光の白根山に登りました。山の頂まで登ったのはこれが初めての体験です。白根山は、1952 年(昭和 27 年)に噴火した以来、今は地震活動が行われている山です。その影響を受けているのか、山頂の周辺は植物がなく、いちばん近いところの木は白っぽい色で、まるで滅ぼされたかのような姿をしていました。まるで死

と生の世界が共存しているかのような、不思議な光景でした。このような光景を目の当たりにしながら、「火」というものがもたらす力って、何十年も経った未だにその影響力を与えるほど強いものであることに、再び驚かされました。

初登山の体験の素晴らしさに、今度また違う山にチャレンジしてみたいと思い

ながら降りてきました。

さて、今日イエスさまは、「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が燃えていたらと、どんなに願っていることか。」と、人々を前にして語っております。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるために来た。」といった、これはどういう意味でしょうか。まるでこの世を火で裁かれるかのような、過酷で、恐ろしい、勢いのある語り掛けです。

先ほど、火山の噴火の影響力をお話させていただきましたが、そこまで行かなくても、身近で起きる火災などによってもたらされる恐ろしさが、どのようなものなのかは言葉では表現できないものです。あっという間に持っていたすべてを放棄しなければならなくなりますし、一切の許しもなく犠牲に犠牲を払わせ、人間が作り出し、働いてきたものを貪欲に食い尽くしていく。これが火災、つまり火がもたらす力です。ですから、人間は火がもたらす緊迫感にただただ追い込まれていくしかない。一瞬の間に奪っていく火の力の前で、ただ緊迫感に脅かされるしかない、それが人間の姿でしょう。このような緊迫感に比喻して今日、イエスさまは語られるのです。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が燃えていたらと、どんなに願っていることか。」

もちろん、私たちは、イエスさまが語っておられる火とは、あの噴火の際の暑い溶岩と同じものや容赦なく一切を食い尽くす火災などとは異なるものであることは

わかります。そしてもう一つわかるのは、「その火がまだ燃えていたら、どんなに願っていることか。」という言葉から、その火はまだ燃えていないこともわかります。それでは、イエスさまが語られる「火」とはいったい何を指しているのでしょうか。

このようなわたしたちと同じ疑問を持つ人たちが、長い歴史の中で、イエスさまが語られるこの火とは「大きな革命」や「世界戦争」であると言っていました。他には、宗教的な熱狂主義の火であるとも言われました。しかし、これらのどちらも、大きな革命であっても神の名で戦う戦争であっても、イエス・キリストの名で行なわれる宗教的な熱狂主義であっても、これらが人間をどれだけ犠牲にさせてきたものなのか、イエス・キリストの名によって戦争をする、それによってどれだけの人が大切ないのちを犠牲にしてきたのか……なのに、まさかイエスさまがご自分に従う群衆を前にして、このような酷いことを語っておられるとは考えられないのです。

それではどういう意味でイエスさまは緊迫感溢れる比較でもって群衆に語りかけておられるのでしょうか。そして、まだその火が燃えていないことにがっかりしていらっしゃるのはどうしてでしょうか。このようなことを念頭におきながらみ言葉に耳を傾けていきましょう。

昔、イスラエルの民は、神が与えると約束してくださった、乳と蜜の流れる国力

ナンに入ったとき、カナンには原住民が住んでいました。このカナンの原住民たちはバアルという神を拝む民族でした。バアルとは豊饒の神で、多産の神です。乳と蜜の流れる地カナンを征服して入ったものの、イスラエルの民らは、しかし、カナンの宗教に振り回され、カナンに定着していく時が経つにつれて唯一の神の代わりに、バアル宗教に走るようになりました。イスラエルの民にとって、唯一神を捨てるということは、自分たちのアイデンティティを捨てることに他ないのに、バアルに唯一の神を交換して行く。自分のアイデンティティを捨てて、今日に見える豊かさや楽しみを求めて、イスラエルの民らは、バアルという神に従って行くのでした。その結果、イスラエル国は二つに別れ、民族同士の戦いが起こり、ついには自分たちの国さえ奪われ、捕虜としての生活を強いられるようになります。

このことです。イエスさまが、あの緊迫感溢れる比喻、つまり、「わたしが来たのは、地上に火をもたらすためにきた。」と語る意味はここにあるのです。つまり、エジプトにいたときの大きな苦しみの中から救い出され、荒野での長い旅の際にもあらゆるものを持って満たして下さった神を体験していながらも、状況が変わることによってそれらしく見えるものに心を移していく人間の自分勝手な姿に、イエスさまは悲しんでおられるのです。

つまり、数えきれない罪の中から救われ、測りきることのできない罪の中から救

われて神の国の民となり、み言葉に与る者として認められていながらも、しかし、人の心は、状況によってこの世的な豊かさに救いの神を交換して行く。神の言葉に従いますと告白しながらも、実はこの世の道徳的な道でしか神を理解しようとし、この世的な倫理感覚に神概念を換え、自分の数え切れない罪を包んでいただいたのに、神の恵みの数を数えている自分がいる。科学的に合う、合わないなど、打算的でなければ神を受け入れようとし、そんな自分がいる。神の愛に無条件に受け入れられているのに、しかし、神のことをプラスマイナスして数え、利益が出る分だけ信じようとする、そんなわたしがいる…昔、イスラエルの民がカナンの豊饒の神バアルを求めて走ったように、家内安全商売繁盛を求めて、そして、そう求めるがために神の本当の姿をバアルに代えてしまう、そんな人間の姿。「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。」と語られるイエスさまの言葉は、このような人間の情けないただ中に「火」を投ずるということ。つまり、私たちの身勝手な思いが、信仰が、主イエス・キリストの投ずる火によって分裂を起こすように、そして主の救いの業へ変えられるように、そうするために主は来られたということ。つまり、私たちはキリストの「火」によって分裂しなければならないということ。しかし、その火はまだ燃えていない、分裂が起こらないからです。

私たちは、毎年聖霊降臨祭、ペンテコステを向かえ記念して礼拝します。ペンテ

コステの出来事は、エルサレム神殿で祈る一人ひとりの上に、燃える炎が下った出来事なのです。つまり、聖霊の燃える炎が人々の上に降りました。この出来事によって弟子たちは始めて自立した者として歩み始めることができました。弱さや疑いを抱えながら、しかし、弟子たちは迫害をも恐れない、どのような状況の中でもイエス・キリストの福音を伝えるために、聖霊の火の力によって宣教の前線に立ったのでした。この火、聖霊の火、つまり主イエス・キリストの炎は、弟子たちに与えられたように、毎年聖霊降臨祭を迎えて礼拝する私たち一人ひとりの中にも、既に与えられているのです。ですから、燃え続けるはずの神の炎が私たちの中には与えられているということになります。しかし、それが未だに燃えていない。燃えているどころか、むしろ、与えられているイエス・キリストの炎を、この世のそれらしく燃えるバアルというものと交換してしまった現実を生きているということ。

今日の第一日課として聞きました旧約聖書はエレミヤ書23章23節からですが、そこでは偽預言者たちの偽預言を厳しく訴えています。「わたしは夢をみた。夢を見た。」と。つまり、偽預言者たちは、見ていない夢を「見た」と話し、まるで夢の中で神さまがみ言葉を託されたかのように嘘を言って、それを預言として振舞っていました。この偽預言者たちは、王や王の側近の機嫌を取りながら適当に預言をしていれば、給料をもらえたのです。悪いこ

とは言わない、厳しいことや辛いことも言わない。王が喜ぶようなことだけを聞かせます。しかし、神さまはこのような預言者のことをもみ殻のようなものであると、強く非難されます。つまり、「わたしの言葉を受けた者は、忠実にわたしの言葉を語ることがよい。もみ殻と穀物が比べ物になろうかと、主は言われる。」（エレミヤ23:28-29）

偽預言者が語る言葉はそれらしく見えるこの世のものと同じもの、バアルです。もし、教会の信仰共同体の中で、この偽預言者が語るような、機嫌を損なうこともなく、嬉しいことや楽しいことだけ聞きたい、辛いことやいやなことは聞きたくない、そう求めてしまうなら、これはキリストの教会ではなく仲良しクラブでしょう。主の言葉を自分が聞きたいままに解釈してしまい、本当の神の姿をバアルに代えてしまうなら、もみ殻にすぎないものでしかないと主は言われるのです。つまり、教会は偽預言者的な働きしか担えなくなるのです。

ですから、「わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うか。そうではない。むしろ分裂だ。一つの家には五人がいるならば、三人は二人と、二人は三人と対立してわかる。父は子と、子は父と。母は娘と娘は母と。しゅうとめは嫁と、嫁は姑と対立して分かれる。」と語られるこの言葉の意味も、神の言葉とこの世のものは対立せざるを得ないという意味なのです。もっと申しますと、私たちの中にあるものと神の

言葉とは対立して当たり前と言う意味なのです。人間の中にあるもの、人間の心は神の言葉に対立しようと、常にそう働きかけてきます。今日は救われたかのように、聖なる自分のように思えても、しかし明日は世の価値基準に染められた日となり、その次の日は神の言葉など心の隅っこにも残っていない…これが私たちの現実ではないでしょうか。

そんなわたしたちのところに主は「火」を投ずるために来られたというのです。そのままにしておいてもよかったのに、身勝手な者だから捨てられて当たり前なのに、しかし、「火」を、燃える神の炎を投ずるために来られたと語られるのです。

つまり、イエス・キリストが私たちがこの世のバアルにひれ伏して、そのバアルの奴隷のように生きるのではなく、ちゃんと作られたときの自分らしく生きられるように、そのためにご自分を「火」となさい、私たちの群れの中にこられたと言うこと。ご自分の体を燃やし、いのちを捨て、十字架の上で大切ないのちをささげながら、私たちの代わりに燃えるような神の怒りに身を投げ出してくださったと言うこと。この方が、神の怒りを愛に代え、今わたしたちには愛の神、主イエス・キリストがともに生きてくださっているのです。本当は分裂するはずの家族との関係も、この方により守られ、敵対は愛へと変わっていくようになったのです。この方が私たちと共にいてくださる限り、私たち一人ひとりは、

自分のアイデンティティを失うことなく、自分らしさを保ちながら生きるのです。誰かを真似しなくてもいい、自分だけにだけ与えられている道を歩むことができるのです。わたしは神の炎、聖霊の火を燃やすことができませんでしたが、この方が代わりにわたしの中で燃え続けてくださっている。それは、私たちが、自分が作り上げたバアルを信じるもみ殻のような人生ではなく、長い人生の旅の中で穀物のように、実りのあった人生を営むことができるように、イエスさまご自身祈っておられるからです。人生の歩みの残りが多くも少なくとも、この方がともにいてくださる限り、私たちは燃え続けるのです。

【8-9 月礼拝予定】

【主日礼拝】 毎週日曜日 朝 10 時 30 分～

8 月 5 日(日) 平和の主日

聖 書：ミカ 4：1～5、エフェソ 2：13-18、ヨハネ 15：9-12

主 題：テレジンの小さな画家たち —野村路子氏—

8 月 12 日(日) 聖霊降臨後第 11 主日

聖 書：コヘレト 2：18-26、コロサイ 3：5-17、ルカ 12：13-21

主 題：豊かさの中の貧困

8 月 19 日(日) 聖霊降臨後第 12 主日

聖 書：エレミヤ 23：23-29、ヘブライ 12：1-13、ルカ 12：49-53

主 題：わたしのバアル

8 月 26 日(日) 聖霊降臨後第 13 主日

聖 書：イザヤ 66：18-23、ヘブライ 12：18-29、ルカ 13：22-30

主 題：救われるのはだれ？

9 月 2 日(日) 聖霊降臨後第 14 主日

聖 書：エレミヤ 9：22-23、ヘブライ 13：1-8、ルカ 14：7-14

主 題：留まるべき場を知る人

9 月 9 日(日) 聖霊降臨後第 15 主日

聖 書：申命記 29：1-8、フィレモン 1-25、ルカ 14：25-33

主 題：わたしの弟子(清水 臣牧師)

9 月 16 日(日) 聖霊降臨後第 16 主日

聖 書：出エジプト 32：7-14、I テモテ 1：12-17、ルカ 15：1-10

主 題：オンリー ワン (Only One)

9 月 23 日(日) 聖霊降臨後第 17 主日

聖 書：コヘレト 8：10-17、I テモテ 2：1-7、ルカ 16：1-13

主 題：地上での幸福

9 月 30 日(日) 聖霊降臨後第 18 主日

聖 書：アモス 6：1-7、I テモテ 6：2c-19、ルカ 16：19-31

主 題：人間の心を示すもの

(説教主題は今のところの予定です。変更になる場合もあります。)

【その他の集会】

- ・ 9 月より第一・三水曜日午前 11 時よりヨハネによる福音書を女性の視点から読みはじめます。関心のある方はどうぞご参加ください。なお、第二・四水曜日午後 7 時よりタ礼拝を行い、旧約聖書から説教をききます。
- ・ 毎週金曜日午後 3 時より女性の視点による聖書の学びを行なっています。特に英語学校生徒を中心に、英語学校授業スケジュールに合わせて行なっております。
- ・ その他、随時(希望にあわせて)キリスト教入門講座・面談など行なわれています。